



ベストティーチャーに聴く 授業の工夫⑨

鹿児島大学 FD 委員会

【発行 / 2023年11月】

医学部保健学科 看護学専攻成育看護学講座
教授 根路銘 安仁



私は鹿児島大学医学部を卒業し小児科医として県内小児科施設で勤務していましたが、現在は、鹿児島大学で教員をさせてもらっています。医学部には教職課程はなく、教員免許も持ち合わせていませんが、昨年度は共通教育で23コマ、学部で88コマ、大学院で72コマを講義していました。もちろん、医学部で特任助手に採用されたのちに、医学教育の研修会や本学のFD委員会主催の会にも参加させてもらって学ぶことができました。私の授業の工夫は、自身が大学で受けたかった講義を、その経験をもとにどう実現するかを模索していることで、以下の4点を中心に行っています。皆さまの少しでも参考になれば幸いです。

1 講義内容を自分自身が面白いと感じ、その知識が将来活用できるイメージを伝える

学生時代に印象に残っている講義は、内容は国家試験には出そうもないと思われた自分の専門分野の疾患について、とても楽しそうに講義をされていました。こんな風に自分が面白いと思えることができればどんなに素晴らしいだろうと思いました。今、学生さんに講義をするために自分の専門分野以外の医学の基礎的な部分を学びなおしますが、一度医療現場をみてからだと、とても面白い知識が満載だと感じています。そのため、この面白さを伝えることができ

れば、学生も興味を持ってもらえるのではないかと考えて、まずは自分が面白いと感じるように学び続けています。

また、学生当時は、知識を段階的に学ぶのは良いのですが、総てを学んだ後に関連が分かることが多く、学んでいることが将来何に役立つのかなど想像がつきにくかったです。現在、情報化社会になると科学の進歩により膨大な量の知識を学びますが、その知識が将来どう活用できるかをイメージできるように伝えているつもりです。

2 他の良い教育者の真似をし、新しい技術を積極的に取り入れる

大学教員になると研究も大事な側面で、学会参加する機会も多くなります。教員になると講演の内容も興味深いですが、それを聴衆にどのように伝えようとしているのかも注目するようになりました。本学のFD講演会でも他分野の先生の講演も聞く機会を得られました。

私の知らない知識をどのように伝えているのか、自分がすごいと思った先生方のスタイルを真似させてもらっています。私のスライドは、評価を受けることが多いですが、このスタイルも私を指導してくれた教授のアレンジしたものだったと思います。また、スライドの技術も発展し、言

葉だけでは理解しにくかったものが、動画など学会でも使用されているのを見て理解しやすくなったので、積極的に利用するようになりました。

講義途中で、学生がどのように感じているのか不安になることがあります。挙手で意見を聞こうとしてもうまくいかなかったです。学会で聴衆へのアンケートシステムを利用しているのを見て、これは良いと思いましたが、高価なシステムだったのであきらめていましたが、現在は、Responを利用できるようになりました。学生同士も皆が同じ価値観でないことがわかるなど、時代の恩恵を感じています。

3 双方向性を担保し、学生からの評価を受け入れ改善する

学生時代に質問したくても講義終了後などに質問する勇氣はありませんでした。また、カリキュラムに関して不満を持っていても伝えることができませんでした。その当時の教授が、医学部生と教育カリキュラムについての座談会を開催してくれて、私の提案を採用してくれたこともあり、とても嬉しかった記憶があります。そのため、学生からの質問をしやすいよう双方向性を担保したいと考えていました。これも、Manabaの学習管理システムが導入されてできるようになりました。

毎講義学生からの質問には必ず答えるようにしています。

また、自分がしていることが自己満足にならないように学生からの評価を受け入れ改善することを心がけています。やはり評価されるのは怖かったです。毎回の講義や各期終了後に学生から感想や意見をもらいました。学生さんも気を使ってくれたのか、ひどい意見はなく、建設的な意見をもらいました。おかげで、小テストの導入等、自身の講義も毎年改善していっていると考えています。

4 学生にも受講するための姿勢を伝える

学生が知らない分野を学ぶ際には、予習の大切さを伝えています。これも自身の経験から来ています。特任助手に採用され、医学教育の研修会に参加しました。その研修会では、FDという単語も今であればFaculty developmentと理解できますが、当時はまだFloppy diskの方が主流で、まず話してい

る単語が分からなければ、日本語で話していても全く理解できなかったことを覚えています。そのため、医学部の講義では、学生さんには事前に教科書等である程度の単語の意味を予習してくるのをお勧めしています。そうでないと無駄な90分を過ごす羽目になってしまうし、効率的でないと伝えています。

21号

22号

23号

24号

25号

26号

27号

28号

29号

30号

ベストティーチャーに聴く授業の工夫⑨

大学理工学研究科(理学系) 理学部理学科地球科学プログラム

教授 山本 啓司

准教授 礼満 ハフィーズ

助教 北村 有迅


1 来歴

理学部理学科地球科学プログラムの「地質図学」と「地層学・古生物学実験」の来歴は30年以上前に遡ります。理学部地学科の山本温彦^{まさひこ}助教授(当時)が原型となる授業形態を組み立て、それを山本啓司(現任)が引継ぎ、井村隆介

(現共通教育センター)、尾上哲治(現九州大学)、仲谷英夫(鹿大名誉教授)、北村有迅(現任)、礼満ハフィーズ(現任)の各先生方と共に少しずつ改良を重ねて現在に至ります。

2 講義と実験・実習の融合



「地質学」分野の基礎となる学修項目は、露頭(岩石の露出)の観察と記載、岩石の薄片(プレパラート)作成と鑑定、化石の分類と同定、地質図の作図と読図など多岐に渡ります。これらをバラバラに配置した授業コマで教授すると、多くの学生はそれぞれ別個のものとして頭にしまい込みます。その状態では、修得した知識や技術を結合して総合的に理解するレベルに到達するのは困難です。そ

こで、複数の授業を統合したスケジュールを組み、座学で学んだ知識を次の実験・実習で学生自身が主体的に岩石を見て、触れて、調査用具を使って実体験し、それをベースに次の座学に進むというサイクルになるように工夫しています。また、コロナ騒動に対処するため、自習できる部分については動画教材を作成し、積極的に活用しています(下のQRコード)。



地質図学



走向・傾斜の測定



岩石薄片の作成法



主要造岩鉱物の鑑定法

3 今後の課題

これらの授業は現在の構成が完成形ではありません。見学先の地層・岩石の露出が土砂災害や土木工事で消滅すること、路線バスが廃止・減便されて実習地へのアクセスが困難になってしまうことがあります。遠方に出かける際は、学生側の交通費負担に配慮してスクールバスを

利用していますが、運転士不足で予約が取りにくくなっています。さらに、野外活動の経験が乏しい学生が増加しているようです。このような状況の変化に対応するには、新たな見学先の開拓と指導内容の改訂を行なっていく必要があります。